

荒尾精先生の書幅発見について

北方心泉顕彰会・相談役
東亜同文書院大学四十二期生

三田良信

(一) 常福寺・北方心泉記念館

金沢市の名勝兼六園に程近い小将町に、慶長十二年（一六〇七）開基祐念によって創建された真宗大谷派に属する北方山・常福寺が在る。歴代の住職は夫々に文藝についての造詣、関心が深く、代々伝えられて来た文物は数多い。特に第十四代の住職北方^{*}心泉が二度に亙る渡清で、布教の旁ら清末の学者や文人達との交流を通して将来した詩・書・画・篆刻等は、いずれも中国の文化の薫り高い逸品揃いである。金沢市の教育委員会では、これ等文物を高く評価して平成十一年に、金沢常福寺歴史資料調査委員会を組織して、『金沢常福寺歴史資料目録』を作成、続いて平成十三年に、この目録中より約五〇〇点を選んで『金沢常福寺歴史資料図録』を作成して世に問うた。寺でも平成十三年に庫裡の改築を機に、これ等文物を広く一般の方にも観て頂けるよ



常福寺（本堂と心泉記念館）

うにしたいとの配慮から、『北方心泉記念館』を併設し、毎年七月二十九日の心泉忌日を中心に催す特別展の外、常時展覧に供している。

※北方心泉は「南京同文書院」設立に関与した。

(二) 野村家所蔵の心泉書について

平成二十一年十一月に、金沢木越町在住の野村さんと仰しゃるご婦人から、以前心泉記念館を訪ねたことのある者だが、自分の処にも心泉の書が幾幅か伝わっているのを読んで欲しいとの依頼があり、早速事務局から出向いて写真に撮り小生の所へ持参された。写真は六枚で、内三枚は明らかに心泉の書で、

一枚は為書に「野村君聞楽将游清国賦以代贖、時庚寅晚秋、心泉迂納」とあって、「烏佛從來慣遠行、因君告别動游情、分明昨夜同携手、月色潮聲到滬城」と言う七絶が書いてある。明治二十三年に清国へ赴く野村聞楽君の送行会で贖はなむけに詠んだもの。

次は、「甲午之夏、心泉曾蒙書於月莊西軒」とあって、所謂「螳螂捕蟬・黃雀在後」の人口に膾炙した語句を四行書にしたもの。

三枚目は、「三十年十一月、心泉曾蒙并記」とあって、大字で「佛」字が書かれ、その下に聞楽氏の弟野村忠榮氏が憲兵として台湾の土匪の乱に出役して戦死したのを悼んで、兄の聞楽氏の依頼によって書いた旨



心泉肖像画 諫山麗吉画

記してある。

以上三枚が心泉の書で、他の一枚には、「加州道々作、榕陰道人」とあつて、坦々とした加賀平野を嚶々たる白山を眺め乍ら歩む感懐を詠った七絶、落款印が押してあるが写真では判読不能、現物を見ることとする。

(三) 荒尾精書幅発見に至るまで

五枚目は草体で書かれていて難読、落款印と関防印が押してあるだけで署名は無い。字数を数えてみると二十八字、最後が「中」字なので、平声上一東韻の七言絶句であろう。六枚目の写真に書幅を納める箱の書きを写してあり、上部が写っていないが「尾君富嶽縦目七截立幅」と読めるので、多分五枚目の書幅のものであろう。そこで改めて落款印を拡大鏡で覗いて見ると、なんと上は「東方齋」下は「荒尾精印」とあるではないか。私は一瞬我が目を疑ったが紛れもなくこれは荒尾精の書幅であるということだ。一刻も早く現物を見て釈文を完成したいと思ひ、事務局から連絡をとって頂いて野村氏宅を訪ねることとした。

(四) 荒尾精先生書幅との対面

平成二十一年十二月十二日、市の北郊、木越団地にある野村氏宅を訪問、挨拶もそこそこに、早速と現物を出して頂く。初めに心泉の書三幅を用意した釈文をお渡しし乍ら説明する。為書に「野村君聞樂」とあるのは「野村喜一郎」の号であると分かる。次いで、榕陰道人の「加州道々作」を見る。落款印に「僧連城印」

「號曰榕陰」とあり、直ぐに西本願寺の僧赤松連城の書であることが判明した。

次は愈々荒尾精の書幅である。先ず関防印を見る。「盡忠報國」という印、いかにも曾つての軍人荒尾精らしい。次に韻字を見る。結句の「中」から想定した通り、起句は「窮」、承句は「雄」と平声上一東韻であることが確認できた。起句冒頭の「薩海」、承句の「蜻蜒」、結句の「巴蜀」「指顧」と判読したのに誤りはなさそうである。一と通り書幅を見終え一応目的を達したので辞去しようとする、これに野村喜一郎の経歴などが入っているのでご参考になればと、「共潤會雜誌」という合本三冊を差出された。私はこの雑誌の第一号の表紙の「共潤會雜誌」の書体を見るなり、北方心泉の書と直感したので、早速に拝借して野村家を辞した。

(五) 荒尾精先生と野村喜一郎氏の接点を探る―『共潤會雜誌』を通し―

抑々『共潤會』とは、その会則の目的の項に、「會員互ニ力ヲ戮セテ孝子貞婦義僕等ノ操行ヲ發揚シ鰥寡孤獨ノ不遇及ヒ不慮ノ災害ニ罹リタル者ヲ救済ス」とあり、また雑則の項に「本会ノ目的ヲ拡充シ成績ヲ發表スル為メニ演説会ヲ公開シ又ハ雜誌ヲ發行ス」とある。この『共潤會雜誌』は明治二十年十一月一日に第一号が発行されていて、その第一号には、

巻頭を飾つて赤松連城の「慈善会に於いての演説」が掲載されており、また巻末には「共潤會紀事」に共潤會設立の首唱者として野村喜一郎の名が挙げられ、「會員名簿」欄には、名誉会員として赤松連城師、特別会員に野村喜一郎、雑誌賛成員に北方蒙（心泉）の名が夫々挙げられている。これによつて赤松連城と野村喜一

郎の關係が判明。

また、合本三冊目の末尾に、大正元年十二月に野村喜一郎が刊行した『対岸之貿易』と題する本の「自叙」が謄写印刷されていて、その中に、

明治十九年時ノ本県工業学校長納富介次郎氏ハ日清貿易ノ急務ヲ唱道ス予家業素ト水産ニ関スルニヨリ意大ニ動キ相呼應シテ以テ為ス所アラシクコトヲ計ル尋デ二十二年故荒尾精氏ハ東洋ノ大勢ニ鑑ミ日清貿易研究所ヲ上海ニ起シ本県ニ遊説シテ研究生ヲ募集スルニ会ス、予因リテ熱心ニ其ノ拳ニ声援ヲ与ヘ県当局者ニ迫リテ要請シ遂ニ県会ノ決議ニ基キ研究生ヲ各郡市ヨリ一名宛

即チ計九名ヲ留学セシムルコト、ナリ翌二十三年適キテ入学ス以テ予ハ県市ノ囑托ニヨリ同年暮上海ニ航シ貿易ノ状態ヲ觀察シ留学生ノ将来ニ関シテ調査スル所アリ、云々。とあり、ここに荒尾精と野村喜一郎の接点のあることが判然した。

また、『共潤會雜誌』第四拾号（明治23年11月28日發行）には、

本会々幹野村喜一郎氏の送別会」という標題で、日清貿易視察として上海へ渡航する野村氏の為本会々員が



発起したる送別会が去る九日本市野田寺町鐔甚樓に於いて挙行され来会者五十余名の多きに上った。席上北方心泉氏が野村氏へ贈れる一絶は左の如し、と先に心泉書幅の冒頭に掲げた七言絶句がそっくりそのまま記載されている。

次いで、『共潤會雜誌』第四十三号（明治24年3月18日発行）の「外報」欄には、野村喜一郎氏の「清国上海通信第一回」が掲載され、この中で、

日清貿易研究所は英租界大馬路にあり、昨廿三年九月の設立にして生徒現時百四十余名に上り而して其所長及教師は左の如し、

所長 荒尾 精（歸朝中なり）全代理 根津 乾（荒尾氏歸朝中の代理にして全氏歸校の節は漢口に赴由）

教員 御幡雅文 白石 周吉 森 安治

木下賢良 竹添治三郎 田中二郎

助教 濱田弘道 清人 桂 林 英人 ウヰイリヤム・ムヲリナン

片山敏彦 以上

また、『共潤會雜誌』第四十五号（明治24年4月23日発行）の「外報」欄には、「清国上海通信第三回」が掲載され、

日清貿易研究所教員及職員は盍し左の如し

所長 荒尾 精

教頭 猪飼麻次郎

教諭 御幡 雅文

教諭 草場謹三郎

教諭 藤木 元吉

教諭 森 安治

助教 小濱為五郎

助教 片山 敏彦

教師 清國人 桂 林

教師 英國人 ボリチニ

幹事 安田 彌藏

副幹事 芥川規矩二

庶務掛兼教諭 青木岩態

會計掛 三池親信

給与掛 原 定吉

病室掛 森 安治

炊事掛 米津佐太郎

評議員 中川 冬得

評議員 宗方小太郎

評議員 小山 元三

※因みに『清国上海通信第二回』は『共潤會雜誌』第四十四号が欠落している為不明。

『共潤會雜誌』の合本第三冊は明治二十五年六月十五日発行の第五拾五号が最後であるが、その後に『金沢の実業』第一號が綴じてあつて、その『雜報』欄に

『縣費遊学生の歸朝』の見出しで

明治二十三年中、本県会の決議により、県費を以て清国上海なる日清貿易研究所に入学せしものは、

那部 武二(江沼)、小槌 芳 (能美)、土井 伊八(石川)、

金島文四郎(金沢)、丹羽 次吉(河北)、小泉市太郎(羽咋)、

坪江 徳太(鹿島)、加藤菊次郎(鳳至)、山岸 淺吉(珠洲)

の九氏なりしか、坪江、加藤の両氏は中途にして退学し、他の七氏は本年六月三十日を以て全所々定の学科

を終了し而して那部、土井^{*}、金島の三氏は尚ほ清国に留りて実地の研究に従事せらるゝ由、小槌、丹羽、小泉、山岸の四氏は海陸共に恙なく、去る八月上旬を以て目出度歸朝せり。また、右四氏は本月中旬を期して金沢に來り、日清貿易上の事に関し計畫する所ある由、因に記す。曩に日清貿易視察のため、清国に渡航して親しく其事情を見聞せし野村喜一郎氏も、四氏の挙を賛成し大に尽力し居るとぞ。

※土井伊八は研究所が併設した日清商品陳列所（華名「瀛華広懋館」）で実地練習に従事。その後、日清戦争勃発で閉鎖された陳列所を継承して「瀛華洋行」を經營した。

おわりに

以上記述が我乍ら冗長に過ぎたが、要は何故に荒尾先生の書が野村家に存在するかを究めたかつたからに外ならぬ。今回の荒尾先生の書幅発見は偶然と言えば偶然だが、平成十六年（二〇〇四）七月の十三、四両日をかけ京都若王子・熊野神社境内に立つ近衛篤磨公撰文の「荒尾先生之碑」の拓本を仲間の協力を得て苦心慘憺採拓したことと思ひ合わせて、なんとなく因縁めいたものを感じるのである。（拓本は霞山会が保管）

では最後に荒尾先生の書幅の写真と七言絶句の釈文を掲げ、先生の当時の感懐に思いを馳せたい。



〈積文〉

〔盡忠報國〕

薩海館湾眼底窮

蜻蜒何處得仲雄

試從芙蓉峰頭望

巴蜀山川指顧中

薩海館湾、眼底に窮まる

蜻蜒何處にか仲雄を得ん

試みに芙蓉峰頭從り望めば

巴蜀の山川、指顧の中

〔東方齋〕〔荒尾精印〕



〔注釈〕

〔薩海館灣〕 鹿児島湾と函館湾。

〔蜻蜒〕 蜻蜒州、秋津島、日本国の古称。

〔仲熊〕 仲熊。漢・王符《潜夫論・五德志》：「世に才子八人有り、伯奮・仲堪・叔獻・季仲・伯虎・仲熊・

叔豹・季狸；忠肅恭懿，宣慈惠和，天下の人、之を八元と謂う。」ここでは優秀な人材の譬え。

〔芙蓉峰〕 ここでは鹿児島島の薩摩半島の南東端に位置する所謂薩摩富士即ち開聞岳を指すか。

〔巴蜀山川〕 「巴蜀」は四川省の古称。明治十九年に渡清した荒尾精は上海で楽善堂主・岸田吟香の知遇を

得て後、四川の中心地漢口に楽善堂支店を開設し、活動の拠点とした。この漢口の地に思いを馳せたのであろう。

〔指顧〕 指で指し示し目で見る。

本書は、荒尾精先生が、日清貿易研究所設立に当たり、北は北海道から南は九州まで日本全国を、優秀な人材を求めて学生募集の遊説をされた折の感懐を、七絶に託されたのであろう。石川県では先に記したように、金沢の有力な実業家であった野村喜一郎氏が、荒尾先生の日清貿易研究所設立の趣意に賛同し、県内の各都市当局を説得して回り、県会の同意を得て九名にも及ぶ学生を派遣するのに尽力をした。

この書は、その時の感謝の意を籠めて、荒尾先生から野村氏に贈られたものと思われる。

なお、昭和九年には野村喜一郎氏を敬慕する有志によって野村翁報思鳥居碑が、金沢市民の台所であり観光名所にもなっている近江町市場に程近い市姫神社境内に建てられ、荒尾先生と日清貿易研究所のことに触れて野村喜一郎氏の輝かしい業績が今に伝えられていることを附記してこの拙稿を閉じることにする。

(二〇一〇年一月十七日記)

南京同文書院設立の経緯

― 北方心泉の日記・ノート及び近衛篤磨の日記より ―

◎はじめに

平成七年の初め頃、北國新聞紙上に、金沢市教育委員会が、金沢市小将町にある常福寺所蔵の文物調査を開始する旨の報道がなされ、その内容は同寺に古くから伝わっているものは勿論であるが、中心をなすものは第十四世住持北方心泉が東本願寺上海別院在院中に本務の傍ら清國の文人達との交流により招来した詩・書・画・印等である。北方心泉はこの他本願寺が南京に日清の子弟教育を目的とした「金陵東文学堂」を開設するに際し当時の清國要路との折衝にあたり、初代の堂長となったほか、近衛篤磨が会長をつとめる東亜同文会が計画した東亜同文書院の設立にも尽力したというものであった。この報道を見て私は、北方心泉なる人物が他ならぬ私の母校同文書院の設立に関係したということは、初めて耳にすることなので、是非これを確かめたいとの思いで早速常福寺を訪れました。来意を告げると現住持北方匡師が快く受け入れて下さり、そんなことならいっそ調査委員のメンバーに入って協力してほしいとのことで、いつの間にか北方心泉顕彰会にも入会を許されて今日に至った次第です。この間、一九九九年には、調査委員会による調査結果が《金沢常福寺歴史資料目録》として刊行され、続いて二〇〇一年に《金沢常福寺歴史資料図録》が野上史郎先生と小生の共著で完成、引続き二〇〇四年には《北方心泉碑文集》が、山中美智子・上田北山両先生の共著小

生の監修で刊行されました。

さて、前置きが長くなりましたが、北方心泉が『東亜同文書院』設立にどう関わったかについては、肝腎の調査、執筆の間の余暇をみて行ないましたので、中々進捗しませんでした。心泉の日記やノートに断片的に出て来る記事によって私なりの判断をし、確証を得ないまま月日を過ごしておりました。

◎北方心泉の日記（明治三十二年）の記録

七月三十一日

―前略―、次―橋通廿一東亜同文会ニ田鍋安之助君ヲ訪フ在ラス

八月一日

田鍋君電話午後訪問スヘシト云即一時来訪セラレ同文会ノ事情ヲキ、此方ノ事情ヲモ詳細セリ明日午後三時有楽町日本倶楽部ニテ長岡副会長及佐藤小将会晤ノ申込アリ

八月二日

早朝田鍋電話ニテ本日ノ約ヲ午前二セント申来レトモ此方ハ先約アレハトテ断ル―中略―午後三時帰りテ田鍋ヲ訪ヒ明日午前十一時ヲ約シテ帰ル

八月三日

―前略―、佐藤小将ヲ訪ヒ南京学堂ノ件ノ要求ニハ頗ル困却セリ四時帰寓、石氏（石川舜台）在ラス不得止出直ヲナシ六時ノ急行ニテ帰西ノ途ニツク

八月十日

南京學堂讓与ノ件ニ付上申書ヲ上海ヘ回ス

↓以下略↓

八月二十四日

上海ヨリ同文會事件ノ主教ノ書局長方ヘ來ル、直ニ送り示サル

◎北方心泉のノートの記録(明治三十二年)

主教ヨリ南京件電案 ※慧日院大谷勝信ナラン

(ユツレ) 此ハ條件ヲコチラヘ御マカセノ事

(ユテカミ) 此ハ讓ルニ付、主教ノ條件ニ付御手紙ヲ即便ニテ參ルコト

(マテ) 此ハ條件ニカ、ハラズ該件ハ主教認メサルモノ

一、名称継統ノコト

二、従來生徒ノ級等ヲ用ユルコト

三、本人ノ望ニヨリ教員ヲ継統セシムル

四、内外生徒ヲ婦宗セシムルコト

五、杭、蘇學堂ハ本宗ノ專有トシテ同文學堂ヲ開クトモ生徒ヲコ、ニ托スルコト

◎北方心泉の日記（明治三十二年）の記録

十月三日

昨日同文会ヨリ長岡子爵電話ニ云、本日午前十一時日本倶楽部ニ來臨ヲ請フトノコトニ付、時刻ニ赴キ子爵ト晤スルコト三時間、平穩ニ局ヲ結び、将来ヲ約シテ別ル、洋食ノ饗アリ。

以上、日記及びノートの記述を綜合しての私見は、東亜同文会は南京に於いて学校を經營する為、先に東本願寺が清国政府の許可を受けて開設したゞ金陵東文学堂の譲渡を本願寺に要請したが、條件が合わず不調に終つた、というものである。このことを裏付ける記録として、本願寺発行宗報第三十号（明治三十四年一月十五日付）に

丁、海外布教

イ、清国 巖圓誠南京東文学堂長として赴任す。

北清事件に付留学生一柳智成外十名帰朝す。

という記事が記載されていて、南京東文学堂はこの時点に於いても存続していたことが証明されるからである。

◎近衛篤磨の日記（明治三十二年）の記録

曾つて東亜同文書院の院長をされた大内暢三先生の子孫に当たる大阪在住の大内洋友氏が昨年五月に常福

寺を訪問されお会いする機会を得た。何でも九州八女の大内家に大内暢三先生が持ち帰ったと思われる鄭板橋の書画があり、板橋の書画には贋物が多くあると聞くので、真贋の程を確かめたいと思っていたところ、偶々インターネットで金沢の常福寺に鄭板橋の書画の存在を知りアドバイスを頂きたく尋ねて来たとのことであった。現物は屏風仕立てになっているので写真を持参されたが、略真物と見てよいのではないかと思われた。

談偶々大内暢三先生と親交のあつた近衛篤磨公の話になり、大内家に近衛公の日記が全巻揃つて保管されていることをお聞きし、早速お願いして、明治三十一年〜明治三十四年のものを拝借することとした。

明治三十二年

十月二十日（金）

一、東亜同文会本部より来状があり（別記）

拜啓、欧州御漫遊を終え御無事清国に御着被遊、大慶至極に奉存候。本会事業は着々実行仕居候間、御安意被成下度候。一、中略一、南京は対清政策上重要な地に御座候間、同地に鞏固なる根柢を作らん為の学堂を設立し、本会派遣の留學生及支那學生を教育する事に致し、佐藤小將自ら進んで之れが経営に当たる筈に御座候。

右経費は凡そ六千円の見積にて、内三千五百円は三井より寄附し呉る、筈、残り弍千五百円は本会支那部予備費中より支出致見込に御座候。初め新に学校を同地に設立するは経費も少からず、且つ南京には既に本願寺別院の設立にかかる南京学堂ありて、同じく本邦人の設立する同種類の学校を増設するは如何かと存候。

に付き、本願寺より其学堂を引受くるを得ば彼是得策ならんと本願寺と種々交渉致候処、別院当事者の承諾に由り交渉遂に纏不申候得共、右予算にて創立の経費には大丈夫に御座候間、断然別に一校を設立する事に決定致候。本会にて別に一校を設立する事に付ては本願寺も之れに反対不致、却つて協和助力する筈に御座候間、其辺は御配慮被下間敷候。―以下略―

右十月二十日付の日記により、私が心泉の日記及びノートの記録によつて推測していた、南京金陵東文学堂を東亜同文会に譲渡する件が不調に終つたことが確証された次第である。次いで

十月二十九日(日)

一、午前三時半南京に着、直に上陸す。端艇の混雑名状すべからず。道台より差廻はされたる一官吏出迎ふ。外に本願寺東派出張所の一柳外両三名、三井組の留學生等もあり。―中略―六時半過南京の市街に達し、先づ本願寺出張所に入る。少時休息す。其間に井手、宗方、白岩、佐々木等は洋務局に至り、総督と会見の事を打合はす。暫時にして帰来る。一行先づ朝飯を喫し、同出張所構内なる金陵東文学堂の状況を聴き、教場等を一覽す。夫より同所を出でて洋務局に至る。訊官某に導かれて客殿に入る。洋務局総弁道台汪嘉棠出でて接す。総督との会見は午後なるべければ、午前中に多少の見物を為す事とす。―中略―本日総督との会見は午後四時なりとの事に付、昨夜の睡眠不足を補わん為暫時眠る。三時半褥を離れ、服を大礼服に変ず。四時一行皆轎に乘じ総督衛門に至る。開門の号令と共に門は左右に開かれ、三発の礼砲は響き、一方には奏樂の声を聴き、両側に総督の親兵整列して捧銃す。又、一門あり、これを出づれば総督劉坤一、自から幕僚を随がへて出迎ふるあり。相互の礼終りて、総督自から導きて客殿に入る。―中略―余は更に東亜同文会の

趣旨を述べ、今回南京にも学校を設くるの考あれば、万事に相当の便宜を与へられん事を望むと乞ひしに、同会の事は既に聞知して貴邦の厚誼に感じ居り、学校を南京に設けらるゝ事の如きは、及ぶ丈の便宜を与ふべしと答へたり。

さて、近衛公が側近と密かに日本を抜け出して欧州漫遊の旅に出たことは有名な話だが、この旅の帰路に清国に立寄つたのである。北方心泉はこの時既に帰国して南京にはいなかったが、近衛公が会談した劉総督とは詩書画をも通して昵懇じこの間柄で、心泉日記の明治三十二年二月八日には、

劉制軍ヨリ洋務局員廖欽元ヲ使者トシテ賀寿ノ答礼トシテ兩前茶兩籠、佛手蓮子各一籠、蓮花式磁器一對、冬笋兩籠

ヲ贈ラル、冬笋ノ一半ヲ楊（仁山）ニ頒送

とあることからそのことが窺える。因みに劉総督より贈られた蓮花式磁器は今も常福寺に大切に保存されてある。

近衛公と劉総督の会談が成功裡に終つた背景に私は北方心泉の陰ながらの尽力があつたと信ずる。心泉は表には現われていないが、南京同文書院、ひいては東亜同文書院の設立の陰の功労者として銘記すべき人物である。

二〇〇六年一〇月四日記

三田良信著作『一か八か』より転載

三田良信（一九二二年二月十四日生）

《学歴》石川県立金沢第三中学校卒業。在上海、東亜同文書院大学豫科終了。同大学学部二年在学中、徴兵延期制度廃止により応召。一九四六年二月特別措置により同大学卒業資格付与。

《職歴》一九四七年（株）大和入社、本社勤務を経て以後、大和食品（出向）、大和高岡店、大和新潟店、東京：日星商事（出向）、再度本社勤務、大和長岡店開設を終えて大和富山店と終始経理を担当す。昭和四十四（一九六九）年二月石川日産自動車販売（株）に出向、常務取締役就任。同四十九（一九七四）年六月、石川日産自動車販売（株）常務取締役辞任と同時に（株）大和退社、二十七年間の大和勤務に終止符を打つ。同年十月、学校法人北陸学院理事（総務部長）に就任し、平成元（一九八九）年三月、停年により北陸学院退職す。

《教職歴》学校法人北陸学院在任中、金沢大学の要請により教養課程の中国語を十年間、また北陸大学外国語学部創設と同時に中国語を十二年間夫々非常勤講師として教える。

日本漢字能力検定一級合格、日本語教育研究所研究員となる。毎年春夏、日本語教育研究所による漢字検定受験の為に「講師養成講座」の講師を二〇〇六年三月まで二十五回に互り担当す。